

令和 5 年 5 月 8 日現在

機関番号：13701

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2022

課題番号：21K21163

研究課題名（和文）セルフケア能力向上に向けた血液透析患者が“見通し”を持つプロセスの探求

研究課題名（英文）Exploring Processes through which Haemodialysis Patients Develop Perspectives Towards the Improvement of Self-Care Ability

研究代表者

栗原 佳代（大橋佳代）（KURIHARA, Kayo）

岐阜大学・医学部・助教

研究者番号：60910057

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、血液透析患者が今後の自分自身についての予測、つまり見通しをどのようにしてもつのかそのプロセスを質的記述的に明らかとすることを目的とした。6名の血液透析患者に半構造化面接を行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析を行った。結果、3つのカテゴリーと13の概念が生成された。血液透析患者は、不安定な未来を見通さざるを得ない状況にありながらも、透析治療を受けることを容認し、“今”に集中することで、自分自身の身体の実感や血液データを頼りにトライアンドエラーを繰り返しながら小さな見通しを積み重ねていたことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

血液透析患者のセルフケア能力向上に向けた研究が数多く行われている中で、患者の“見通し”に着目した研究はない。したがって、本研究結果は血液透析患者のセルフケア能力向上に向け、“見通し”という新たな概念を活用するための基盤的研究としての意義がある。本研究結果は、血液透析患者が見通しを持つために必要な要素および患者が見通しを持つことを阻害する要素を明らかにしたといえる。よって今後は本成果を活用し、患者が見通しを持てるような看護支援を検討・実施し、その効果を検証していくことができると考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to qualitatively and descriptively clarify the process of how patients develop their own ‘perspectives’.

A semi-structured interview was conducted with haemodialysis patients. Modified Grounded Theory Approach (M-GTA) was used in the analysis. Six patients were interviewed. 13 concepts and 3 categories were generated. Haemodialysis patients were forced to look ahead to an unstable future but concentrated on the present to try overcome it. In their daily life, to recuperate patients accumulated small prospects, while repeating trial and error, relying on their own physical sensations and blood test data.

研究分野：看護学

キーワード：血液透析患者 セルフケア 見通し 質的記述的研究

1. 研究開始当初の背景

血液透析患者は、水分・食事・服薬・シャント管理等の自己管理が必要であり、高いセルフケア能力が求められる。血液透析患者のセルフケアに関して、自己効力感を高めることがセルフケアを向上させるとの報告がある (Hui et al., 2014)。自己効力感とは、こうすればうまくいくはずだという結果予期と自分にはそれができるという効力予期にわけられ (Bandura, 1997) いわば自己管理を遂行できる自分自身を予測することといえる。一方で、血液透析患者の多くは将来に不安を持ちやすく (原他, 2004) 不安がセルフケアを低下させることも報告されている (Hui et al., 2014)。これらのことから、血液透析患者は今後について様々な予測を立てており、つまり“見通し”を持っており、それが患者のセルフケアに関連しているのではないかと考えた。したがって研究者は先行研究において、見通しとセルフケア能力及びその他の因子との関連を示す構造モデルの作成を行った。その結果、血液透析患者は見通しを持っており、それがセルフケア能力と関連していることが明らかとなった (Kayo et al., 2021)。しかしながら、患者がどのようにして見通しを持つのか、その過程は明らかでない。透析治療は半永久的に行う必要があり、こうした状況にある患者が見通しを持つには、何かしらの葛藤や困難が存在するのではないかと推測した。したがって、患者が見通しを持つまでのプロセスについて、詳細に明らかにする必要があったと考えた。本研究によって血液透析患者が見通しを持つプロセスを明らかにすることで、患者が見通しを持つために必要な支援を検討でき、しいては血液透析患者のセルフケア能力向上の支援において“見通し”を活用していくことができると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、血液透析患者が見通しを持つために、自分自身の病状や現在の生活をどのようにとらえているのか、その思考プロセスを質的記述的に明らかとすることである。

3. 研究の方法

(1) 研究デザイン

本研究は、まだ十分な文献・先行研究が存在せず測定方法や数量化する方法が確立されていない“見通し”という概念をテーマに扱う研究であるため質的記述的研究デザインを選択した。(南, 2008)

(2) データ収集方法

維持透析療法を実施している医療施設にて、20歳以上の外来通院で維持血液透析療法 (Hemodialysis :HD) を受けている患者を対象として、半構造化面接を行なった。初めに年齢・透析歴・透析回数・透析時間・透析に至った原因疾患・家族構成などの基本情報を聞き、その後「自己管理を行うにあたって見通しを立てておられますか」というような質問から参加者に「見通し」について自由に語ってもらった。語りの中で、研究者が疑問に感じたことや内容を深めたいと感じたことに対しては適宜質問を行った。面接内容は参加者の同意を得て、ICレコーダーに記録した。

(3) データ分析方法

本研究は、分析手法として修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (以下、M-GTA) を用いた。M-GTAは、社会的相互作用に伴う人間行動に関して、プロセス性を持って説明するための手法である (木下, 2003; 木下, 2020)。本研究において、研究者は、血液透析患者が透析治療を行う中でどのようにして見通しを持つのか、そのプロセスを明らかにしたいと考えたためこの分析方法を採用した。具体的には、木下 (2003; 2020) の方法を参考に下記の手順で行った。

- ・録音したインタビュー音声を書き起こした逐語録を何度も読み返す。
- ・「血液透析患者が見通しを持つプロセス」に関連する箇所や文脈に着目し、それをひとつの具体例とする。それぞれの語り手に同じ作業を繰り返し、各具体例の類似性を検討し、概念を生成する。
- ・生成した概念を、類似した具体例が豊富にあるか、対極例において比較できるか等の観点から精査する。
- ・生成した概念と他の概念との関係を検討し、カテゴリーを作成する。カテゴリーの相関関係から分析結果をまとめ、その概要を簡潔に文章化し (ストーリーライン)、さらに結果図を作成する。

真実性を確保するため、上記過程で、慢性疾患患者の看護のエキスパートであり、かつ質的記述的研究の経験豊富な者に複数回スーパーバイズを受けた。さらに、結果の妥当性を確保するため、血液透析患者の看護に携わった経験が豊富な看護師4名に生成された概念・カテゴリー・結果図・ストーリーラインについて、確認してもらった。

(4) 倫理的配慮

研究参加者には、研究参加に一度同意した後でもいつでも参加を取り消すことができること、研究に参加しないことで不利益を被ることは一切ないことを説明した。また、聞かれたくない質問があれば答えなくてよいこと、面接を中断したくなった際にはいつでも中断できることを説明した。個人情報については厳重に取り扱い、研究結果発表の際に個人が特定されることはないことを説明した。本研究は岐阜大学医学倫理審査委員会の承認を得て実施した。(承認番号:2021-B048)

4. 研究成果

(1) 研究参加者の概要

研究参加者は男性3名・女性3名の計6名であった。研究参加者の平均年齢は 59.7 ± 10.8 歳、平均透析歴は 9.0 ± 9.5 年であった。透析の原因疾患は糖尿病性腎症1名、白血病治療1名、不明が4名であった。面接回数はすべての参加者に対して1回のみであり、平均面接時間は 44.7 分 ± 19.7 であった。

(2) ストーリーライン

分析結果から、13の概念と3つのカテゴリーが生成された。そして概念とカテゴリーの関係から、下記のようなストーリーを描くことができた。以下、カテゴリーを【】、概念を○と示す。

血液透析患者は、先が見えない日々を、【“透析をして生きていく”ために今に集中する】ことで乗り越えていた。そして、日々の療養生活の中で感じる身体の不調から逃れるために、苦痛症状がいつ、どのように出現するのかを予測し、対処しようとしていた。つまり、患者は身体の辛さから逃れるために見通しの獲得を目指した。また、周囲の人をみて「ああなりたい」もしくは「ああなりたくない」と感じて予測を立てており、周囲の人が見通しを持つきっかけや指標となることがあった。患者は自らの予測に基づいて必要と感じた行動を日々の療養生活の中で実践し、自分自身の身体の実感や血液データの検査結果から、その行動の効果を判断することを繰り返し、【身体の実感や血液データを頼りにトライアンドエラーを繰り返しながら小さな見通しを積み重ねる】ことを行っていた。しかしながら、情報源の少なさから、それは身近なものにとどまっていた。

患者が先を見据える際には、【“透析治療を受ける”という現実が不安な未来を見通させる】ため、前向きな未来の予測ができずにいた。しかし、一部の患者は大切なひと・ものの存在が透析継続の活力となり、透析治療に自己参加しているという認識を持つことで、適切な自己管理に必要な先の予測とそれに基づく対処、つまり見通しを持ち積み重ねていくことを継続していた。一方で、そういったものがない患者は、透析の継続といった長い視点は持てず、1日1日を生きていくことでやっとであり、日々感じる可能性のある身体の不調から逃れるためだけに予測を立て、対処していた。

(3) カテゴリーと概念

カテゴリーおよび概念の定義を下記に示す。

【“透析をして生きていく”ために“今”に集中する】

このカテゴリーは、生きるために、つきまとう不安な未来ではなく“今”に集中する透析をして生きていくことを容認したの2つの概念から集約された。血液透析患者は透析をして生きることを容認し、透析をして生きていくために不安な未来ではなく今に集中していた。

生きるために、つきまとう不安な未来ではなく“今”に集中する

定義：透析患者には、透析をいつかはやめるもしくは、やめざるを得ないという不安な未来が常に付きまとうていた。患者はそれを真正面から見通すことで自分が壊れるとわかっていた。そのため、不安な未来ではなく“今”に集中しようとしていた。

透析をして生きていくことを容認した

定義：患者は、透析をして生きていくことを決断まではいかないまでも容認していた。

透析治療に自己参加しているという認識を持つ

定義：患者は、透析治療をしているのは他の誰でもない自分自身であることから、透析治療に対する参加意識を持っていた。

透析をして生きていくことが受け入れ切れず、見通しが持てない

定義：透析をして生きていくことを望んでいない患者は、見通しが持てず、日々を行き当たりばったりで過ごしていた。

身体の辛さから逃れるために見通しの獲得を目指した

定義：患者は、これまでの透析生活の中で感じた身体的苦痛の経験から、それを回避するために苦痛が生じやすい状態を予測し、事前に対処しようとしていた。

【身体の実感や血液データを頼りにトライアンドエラーを繰り返しながら小さな見通しを積み重ねる】

このカテゴリーは トライアンドエラーを繰り返して自分なりの小さな見通しを積み重ねていく、血液データで答え合わせをする、身体の実感を伴った効果が見通しを確かなものにしていく、情報源の少なさから見通しは身近なものに留まる の4つの概念から集約された。血液透析患者は情報源の少なさから自分自身の身体の実感や血液データを頼りに自分でトライアンドエラーを繰り返しながら身近な見通しを積み重ねていた。

トライアンドエラーを繰り返して自分なりの小さな見通しを積み重ねていく

定義：患者は、短いスパンの予測を持ち、それに基づいて自分なりの対処を実際に行ってみるということを繰り返していた。そうしたトライアンドエラーを繰り返しながら自分の中の見通しを確立させていた。

血液データで答え合わせをする

定義：患者が小さな見通しを積み重ねていく際に、血液データは客観的に自己の状態を指し示すものとして重要な指標となっていた。透析患者は自分の行ってきた生活の答え合わせのように血液データを活用していた。

身体の実感を伴った効果が見通しを確かなものにしていく

定義：患者がトライアンドエラーを繰り返しながら見通しを積み重ねる中で、身体的な効果の実感というものが重要になっていた。

情報源の少なさから見通しは身近なものに留まる

定義：患者は、医療者や同じ透析患者、周囲の人と話すことはあるが、合併症や身体のことなど、遠い先のことについては話す機会がなく、情報源が少ないことから見通しは身近なものにとどまっていた。

周囲の人が見通しを持つきっかけや指標となる

定義：患者は自分の周囲の人を見て、「こうなりたくない」と感じ見通しを持つようになったり、「ああいう方もいるから大丈夫」という安心感を持ったりしていた。また、同じ透析患者の自己管理の工夫を聞いて自分の見通しづくりの指標として活用していた。

【“透析治療を受ける”という現実が不安な未来を見通させる】

このカテゴリーは、自己管理ができず透析治療に至ってしまったやせなさが未来への前向きな見通しを邪魔する、“治らない・一生続けなければならない”という透析治療の現実から不安な未来を見通さざるを得ない の2つの概念から集約された。血液透析患者は、透析治療を受けざるを得なくなった過去や透析治療を受けている現在の自身の姿から不安定な未来を見通していた。

自己管理ができず透析治療に至ってしまったやせなさが未来への前向きな見通しを邪魔する

定義：患者は、日々の透析治療に伴い自己管理を行う中で、ふと過去を振り返り、自己管理ができずに透析に至ってしまった自分へのやせなさを感じていた。そうした気持ちは患者が未来に対して前向きな見通しをもつことを邪魔していた。

“治らない・一生続けなければならない”という透析治療の現実から不安な未来を見通さざるを得ない

定義：患者は、腎不全は治らない、透析を今後も一生続けなければならないということを事実として認識していた。その事実から患者は、いつかは透析治療をやめるもしくは、やめざるを得ないという不安定な未来を見通さざるを得ない状況にあった。

大切なひと・ものの存在が透析継続の活力

定義：大切なひとやものの存在は、患者にとって透析を継続する活力となっていた。反対に、そういったものがない患者は透析の継続といった長い視点は持たず、1日1日を生きていくことでやっとであった。

(4) 考察

本研究で血液透析患者は、透析治療を受けるという現実から、不安定な未来を見通さざるを得ない状況にありながらも、“今”に集中し、よりよい透析生活を送るために、自分なりの見通しを積み重ねようと努力していることが明らかとなった。血液透析患者は、透析治療という性質上一般的に、死に向かって歩んでいる印象がある。しかしながら、患者が持つ見通しは死といった

マイナスなものだけでなく、日々の療養生活の中で起こりうることを見通し、少しでもよりよく生きるためのものであった。看護師は患者がこうした見通しを持つ力があるということを認識し、患者に必要な情報を、患者が理解できるように提供していく必要がある。本研究では患者の見通しは情報源の不足から身近なものにとどまっていた。そして、患者は身体的実感や血液データといったものを頼りに見通しを積み重ねていた。つまり患者にとって、経験していないことは理解し難く、予測も立てにくいと考えられる。従って医療者は、知識を提供する際に患者が具体的に理解しやすいよう工夫する必要がある。本研究結果から、患者の身体的感覚やデータと結びつけながら指導や情報提供を行うことが有効であると推察できる。また、本研究で患者は周囲の人を見通しの指標としていることも明らかとなっている。よって、透析患者同士の交流を深め、同病者の経験を踏まえた知識を得られるような機会を作っていく必要があると考える。

(5) 今後の展望

本研究で血液透析患者が見通しを持つプロセスを明らかにしたことで、患者が見通しを持つために必要な要素、障害する要素が明らかになったといえる。研究者が行った先行研究において、「透析患者としての生活が続く見通し」と「自分らしい生活が続く見通し」がセルフケア能力を高めることが明らかとなっている(Kayo et al., 2021)。従って今後は、本研究と先行研究の結果を合わせて活用し、患者に見通しの指標となる周囲の人と関わる機会を提供したり、血液データや身体的実感を伴った経験に基づく知識の提供を行ったりして、患者が「透析患者としての生活が続く見通し」や「自分らしい生活が続く見通し」を持つことができたか、そしてそれによってセルフケア能力が向上したのかを探求していくことが必要であると考えられる。また、透析を受けることを受容できない患者や、不安定な未来に対する見通しが大きすぎる患者に対して心理的ケアを行い、前向きな見通しを持ち、セルフケア行動を行っていけるような支援を検討する必要があると考える。

尚、本研究は現在学術誌への論文投稿準備をしている過程であり、今後より詳細な研究結果を公表していく。

<引用文献>

- Bandura A.(1997): Self-efficacy; The exercise of control, W.H. Freeman, New York.
- 原 明子, 林 優子(2004),血液透析患者のストレスと対処,岡山大学医学部保健学科紀要 15(1),15-21
- Hui Li, Ya-fang Jiang, Chiu-Chu Lin (2014):Factors associated with self-management by people undergoing hemodialysis: a descriptive study, Int J Nurs Stud, 51(2), 208-2
- Kayo Ohashi, Michiko Inagaki, Keiko Tasaki, et al.(2021),Development of a perspective structural model for self-care in patients on hemodialysis, Journal of Wellness and Health Care,44(2):23-34
- 木下康仁(2003): グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い , 弘文堂, 東京
- 木下康仁(2020): 定本 M-GTA 実践の理論化をめざす質的研究方法論 , 医学書院, 東京
- 南 裕子編集(2008):看護における研究, Page67-68, 日本看護協会出版社, 東京

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------